

（若狭小浜藩の発展 酒井家と家中）

酒井家と小浜藩の発展

概要

有力で良い縁故を持っている酒井家は、2 番目の小浜大名として藩を治めました。酒井氏で初めて藩主となった酒井忠勝（1587 年～1662 年）は小浜城を完成させ、港町小浜をさらに発展させる様々な施策を導入しました。酒井家は、200 年以上にわたり、神社や寺院に資金を提供し、若狭漆器などの地元の工芸品を奨励し、小浜港を介した実入りの良い海上貿易を監督しました。

もっと詳しく知る

酒井忠勝による統治

1634 年、酒井忠勝が小浜藩の統治者になりました。彼は徳川家の長年の家臣であり、老中（「長老」）や大老（「偉大な長老」、将軍に次ぐ地位）など、徳川幕府でいくつかの重要な地位を占めていました。彼は幕府の本拠地である江戸（現在の東京）でほとんどの時間を過ごし、藩を任せている者と頻繁に手紙で通信し、遠方から統治を行いました。

忠勝は、以前は川越藩（現在の埼玉県）の藩主であり、小浜へ移った際、東日本で人気の芸人たちや芸能のスタイルを持ち込みました。その一つである雲^{うん}浜^{びん}獅子^{じし}という獅子の舞は、今でも小浜のある一地区で演じられています。

小浜城の完成

酒井政権の下で、初代藩主であった京極高次（1563 年～1609 年）が着工した小浜城は、30 年以上の歳月を経て 1641 年に完成しました。小浜はすぐに城下町として栄え、繁華街のある賑やかな港となりました。酒井家はまた、漆器やその他の伝統工芸を作る若狭の職人たちを支援したことで知られています。

酒井家による統治の末期

酒井家は藩制が廃止された 1871 年まで小浜を統治しました。第 14 代、最後の酒井家大名であった酒井忠^{ただあき}義（1813 年～1873 年）は、京都で徳川幕府の代表も務めました。徳川幕府の崩壊と 1868 年の天皇制の回復をめぐる激動の政治的出来事の間、忠義は新たに即位した明治天皇（1852 年～1912 年）の敵とみなされそうになりました。しかし、小浜藩士の巧みな政治戦略により、彼は天皇に忠誠を誓うことができ、小浜藩が戦争を回避するのに役立ちました。

展示品

ひと揃いの鎧は、最後の小浜大名であった酒井忠義のものでした。その鎧の大部分は江戸時代(1603 年～1867 年)に作られましたが、兜ははるかに古く、14～16 世紀のいつ頃かに作られました。鎧に付けられた飾り金具には酒井家の家紋が入っています。この他にも、酒井家の系図、朝鮮半島にあった朝鮮王朝の通商代表が酒井忠勝に送った書簡の写し、宮廷の装束を着た忠勝の肖像が描かれた 1660 年の掛け軸などが展示されています。若狭漆器の技法を現代に生かした四重塗りの箱や、貴重な品を入れるための伝統的な漆塗りの箱と蓋を再現したものは、酒井家の統治下で酒井家に奨励された郷土工芸の例です。